

北条政子と日野富子

——第十五代天皇・神功皇后と
女のおさめ侍るべき国・姫氏国——

金光哲

第一章 尼将軍—北条政子

(1) 皇基の擁護者

北条政子は、「承久の乱」の四年後、嘉禄元年（一二二五）七月十一日、六十九才で入滅した。『吾妻鏡』⁽¹⁾ 嘉禄元年七月十一日条の薨伝に、十一日庚午。晴。丑刻、二位家薨。御年六十九。是前大將軍後室、二代將軍母儀也。とあるように、鎌倉幕府初代將軍・源頼朝の正室で、頼家と実朝の母であった。



薨伝の後半はつづいて、

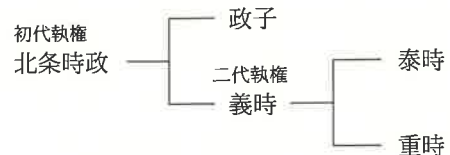
同_レ 于前漢之呂后_レ 令_レ 執_レ 行天下_レ 給。
若又神功皇后令_レ 再生_レ。令_レ 擁_レ 護我国
皇基_レ 給歟_々。

とある。この薨伝の後半部分は短い文であるが、けっして理解しやすい文ではない。なぜ前漢の呂后が登場するのか。北条政子は、なぜ神功皇后の再生者なのか、なぜ皇基の擁護者なのか。

『吾妻鏡』政子関連の記事から、「令_レ 擁_レ 護我国皇基_レ 給歟」と連動すると思われる記事を探してみると、承久三年（一二二一）三月廿二日条に、

波多野次郎朝定為_レ 二品使_レ 進_レ 発伊勢大神宮。是今晚、有_レ 二品夢想。面二丈許之鏡浮_レ 由比浦浪、其中有_レ 聲云。吾是大神宮也。天下_レ 鑒_レ 留仁、世大_レ 濫_レ 天兵_レ 於可_レ 徵。泰時吾_レ 於鑒_レ 者 太平_レ 於得_レ 牟者。

がある。二品政子は「夢想」に現われた天照大神の託宣によって、「天下太平」祈願のため、伊勢大神宮に使者を派遣している。泰時とは、弟の二代執権・義時の子で、二か月後の「承久の乱」では、鎌倉軍の「大將軍」として京都の天皇軍と戦い、勝利をもたらした。ここに泰時が登場するということは、この「夢想」の記事が、「承久の乱」と密接に連動したものであることを示唆している。



また、承久三年閏十月十日条には、土御門院

(1) 国史大系『吾妻鏡』、吉川弘文館

の土佐遠流の記事につづき、天照大神に言及し、
天照大神者、豊秋津州本主、皇帝祖宗也。
而至_レ于八十五代之今、何故改_レ百皇鎮護
之誓、三帝・両親王令_レ懷_レ配流之恥辱_レ
御哉。尤可_レ恠_レ之。

と「皇帝祖宗」とする。この記事によって、また「二品夢想」の記事が「承久の乱」に密接に関連し、それを前提にして意識的に構成された凶事の前兆記事であることが判明する。

鎌倉では、正治元年（一一九九）の源頼朝の死去後、二代將軍頼家と御家人、有力御家人相互の抗争があいついだ。建仁三年（一二〇三）には、頼家の妻の岳父・比企氏の乱の失敗によって、頼家は將軍職を退けられ、実朝が第三代將軍に就任した。しかし、その実朝も承久元年（一二一九）正月、頼家の遺児公暁に殺された。結果、幕府の実権は北条氏に移行し、北条執権政治が執り行われた。

一方、後鳥羽上皇には、鎌倉のこれらの動揺が、幕府の政治的不安定と弱体化として理解され、承久三年（一二二一）五月十五日、北条義時追討の「官宣旨」をくだし挙兵した。しかし、この「承久の乱」は、約一ヶ月で幕府側の一方的な勝利に帰した。乱後幕府側は、後鳥羽上皇を隠岐に、土御門上皇（中院）を土佐に、順徳上皇（新院）を佐渡に、六条親王を但馬に、冷泉親王を備前に、それぞれを配流した。

幕府の立場で編纂した『吾妻鏡』が、この配流に対して、何故に「百皇鎮護之誓」を改め、「配流之恥辱」をいだかしめるのか、怪しむべきことである、と批判している。しかし、この批判が真意でないことは、つづいて、

凡去二月以来、皇帝并摂政以下、多_下天下

可_レ改之趣蒙_レ夢想告_レ御_上。新院御夢、或夜、有_レ船中御遊_レ之處、覆_レ其船。……是等何、非_レ宗廟社稷之所_下示哉。然而、君臣共不_レ驚_レ之御。……

とする記事がつづき、この中で、二月以来「皇帝并摂政」以下の人々に、天下改むべき夢のお告げがあったにもかかわらず、適当な処置を取らなかった、と強調している。

つまり、この記事は、三帝・両親王の「配流之恥辱」が、天下改むべき夢想にしたがわず、「宗廟社稷」への適当な対応を講じなかった結果であると強調し、反面、三月廿二日条の「二品夢想」の記事は、この記事に対称的に対応したもので、二品政子が「皇帝祖宗」天照大神の忠実な崇拝者であり、「皇基」の尊重者であることによって、「三上皇配流」が天照大神の神意に抵触するものでないことを、強調した記事なのである。

ところで、この記事と類似するものに『六代勝事記』⁽²⁾（以下、『勝事記』）がある。これに、

抑、時の人うたがひて曰、我国はもとより神国也。人王の位をつぐ、すでに天照太神の皇孫也。何によりてか三帝一時に遠流のはぢある。

とある。

平田俊春氏は「吾妻鏡と六代勝事記」⁽³⁾において、この『勝事記』が「吾妻鏡の材料となつてゐる」とし、「承久変直後、公家側の人が書いたもの」と主張した。通説⁽⁴⁾では、『勝事記』の文中に「貞応の今にいたるまで」とあり、貞応二年（一二二三）五月の土御門上皇の土佐から阿波への遷御記事があることから、これ以降、翌十一月の改元までの間の成立と見られている。

(2)『群書類従』第三輯、統群書類従完成会
(3)『吉野時代の研究』、山一書房、昭和十八年

(4)『群書解題』帝王部、統群書類従完成会

ところで益田宗氏は、平田氏の説を批判し、論文「吾妻鏡のものは吾妻鏡にかえせ—六代勝事記と吾妻鏡—」⁽⁵⁾で、「貞応の今」を「装った作者の筆」とし、「成立年代を十四世紀初め（永井貞秀書状）以前でありえても、十三世紀末（吾妻鏡の成立）以前まで溯りえないと結論」し、資料として逆に吾妻鏡をあげた。引用文の「永井貞秀書状」とは、金沢文庫所蔵の十四世紀初頭の古文書のことで、文中に「六代勝事記」がある。

五味文彦氏は、『吾妻鏡の方法』⁽⁶⁾の第Ⅰ部・三・1において、『吾妻鏡』に原史料として『玉葉』や『平家物語』『勝事記』などが、「そのままの形で利用されたとはとても考えられない」とし、注の3で、相互の「よく似た記事」は「同じ史料を違った形で利用したもの」とする。つまり『吾妻鏡』『勝事記』以前に、共通に依拠した史料の存在を予想する。

しかし、政子関係記事に付与した『吾妻鏡』編纂者の思想的・政治的意図の観点で見れば、『吾妻鏡』が『勝事記』を参考にしたものであろうが、またその逆であろうが、更に両者の前に共通の史料が存在したものであっても、二品政子「皇基の擁護者」の主張の立場にとれば、文言が『吾妻鏡』の思想的立場を的確に表現しているか、どうか問題なのであって、この条の文言を『吾妻鏡』の主張として理解すべきなのである。

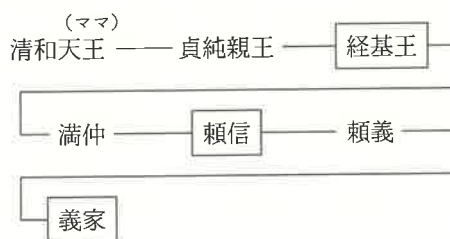
(2) 頼朝御願書と頼信告文

寿永元年（一一八二）二月八日、「四海泰平万民豊樂」のため、源頼朝が伊勢太神宮に奉納した「御願書」⁽⁷⁾には、

……源朝臣頼朝、礼代御弊砂金神馬等令_二棒斎持_一天、天照百太皇神広前に恐_二天毛申_一天申久。頼朝訪_二遠祖_一被_二神武天皇初_一天、日本国豊葦原水穗_二尔令_一濫觴_一天、五十六代_二仁相当_一礼留_一清和天皇_二乃第三_一乃孫_二与利_一、携_二武芸_一天護_二国家_一利、居_二衛官_一天耀_一朝威_一須。

とあった。頼朝はここで「遠祖」を第五十六代清和天皇の孫に求め、「清和源氏」の嫡流として、「武芸」でもって「朝威」を耀やかした、と強調した。

永和三年～応永二年（一三七七～九五）成立の『尊卑分脈』⁽⁸⁾「清和源氏下」第一によれば、



とあり、第三には、



とある。「経基王」に、「天徳五年（九六一）六月十五日、始而賜_二源朝臣姓_一」とあって、経基王から「源姓」を称した。

この系図から、源頼朝は河内源氏の始祖・頼信の後裔で、八幡太郎義家の流れをくむことがわかる。その源頼信は永承元年（一〇四六）、羽曳野市の応神陵（誉田山陵）に「告文」⁽⁹⁾を

(5) 『中世の窓』第七号、中世の窓同人、昭和三十五年

(6) 『吾妻鏡の方法』、吉川弘文館

(7) 『吾妻鏡』寿永元年二月八日条

(8) 国史大系『尊卑分脈』第三篇、吉川弘文館

(9) 『大日本古文書』家わけ第四、石清水八幡宮之一、東京大学出版会

捧げたが、それに、

倣^{つしむデ} 奉^{あきらメ} 煖^{あきらメ} 先祖之本系^{あきらメ} 者、大菩薩之
聖跡者、忝^{あきらメ} 某廿二世之氏祖也。

とあって、源頼信の「廿二世之氏祖」が、八幡
大菩薩（応神天皇）であるとし、「廿二世之氏
祖」の割注に、

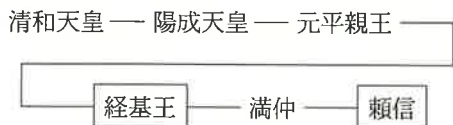
先人新^{しんぼち} 発（注：満仲）、其先経基、其先元
平親王、其先陽成天皇、其先清和天皇……

とあり、別に、

所謂曾祖陽成天皇者、権現之十八代孫也。

頼信者、彼天皇之四世孫也。

とあって、応神天皇の「十八代孫」陽成天皇の
「四世孫」であるとした。

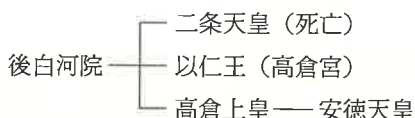


以上の記事から、星野恒^{ひさし}氏は明治三十三年に
「六孫王ハ清和源氏ニ非サル考」⁽¹⁰⁾を発表、「経基
王」の「清和源氏説」を否定、かつ「陽成源氏」
説を主張した。「経基王」は、清和天皇の「第
六皇子」の貞純親王の子であることから、「六
孫王」と称した。

このように、頼信以下の河内源氏の出自に対
し、「清和源氏」説と「陽成源氏」説の両説が
存在する。しかし、本稿はそのどちらかを主張
しようとするものではない。源頼朝が「清和源
氏」にし、「陽成源氏」にし、頼朝が自己
を「皇基」につなぎ、「朝威」を翔かす者

である、と主張している点を強調したいだけで
ある。

治承四年（一一八〇）四月九日、後白河院の
第二皇子・以仁王^{もちひと}は、平家追討の「令旨」⁽¹¹⁾を発
した。「令旨」には、平家側が擁立した安徳天
皇やその父・高倉上皇を意識して、「最勝親王
勅」⁽¹²⁾と称すともに、後白河院を幽閉した平家を
糾弾した。



頼朝は四月二十七日⁽¹³⁾「令旨」を受け取り、
八月十七日伊豆で挙兵した。頼朝の動静を伝え
聞いた九条兼実⁽¹⁴⁾は、『玉葉』治承四年九月三日
条に、

又伝聞、謀叛賊・義朝子、年来在^レ 配所伊
豆国、而近日事^レ 凶惡。……彼義朝子、大
略企^レ 謀叛^レ 歟。宛如^レ 将門^レ 云々。

と、頼朝を「謀叛賊・義朝子」と表している。
九月五日に頼朝追討の「宣旨」⁽¹⁴⁾が発せられてい
る。

『玉葉』治承五年（養和元年）九月七日条に、
自^レ 東国所^レ 奉^レ 太神宮^レ 之告文、尹明持
来。披見之處、文章甚逆、誠足^レ 嘲者歟。
但被^レ 最勝親王宣^レ 併ト書載。此事尤不審。
争進^レ 神明^レ 之告文載^レ 虚誕^レ 哉。

とあって、これから九月以前、八月それとも七
月、頼朝の伊勢大神宮への「告文」奉納の事実

(10)『史学雑誌』一一編二・三号、史学会

(11)『吾妻鏡』治承四年四月二十七日条。『源平盛衰記』
卷第十三、「高倉宮廻宣」（『物語日本史大系』第三卷、
早稲田大学出版会、昭和三年）

(12)『吾妻鏡』には「最勝王勅」とあるが、『源平盛衰記』
に「最勝親王勅」とあり、『明月記』（国書刊行会）治
承四年九月条や、『玉葉』（国書刊行会）治承五年九月

七日条に「最勝親王」とある。

(13)「令旨到来。仍欲^レ 挙^レ 義兵^レ」（『吾妻鏡』治承四
年四月廿七日条）

(14)「去五日、大外記大夫史等、依^レ 召参^レ 院有^レ 評議
可^レ 追討^レ 之由、頭弁宣下」（『玉葉』治承四年九月九
日条）

を確認できる。

これに「被_レ最勝親王宣_一」とある。最勝親王（以仁王）の決起は、前年の治承四年五月に露見、十五日に逮捕命令が出され、二十六日には宇治で敗死している。にもかかわらず、頼朝は養和元年八月の段階でなお、以仁王の令旨をスローガンにしていたのである。つまり、後白河院の立場からいえば、頼朝は「謀叛賊」の立場にいた。

しかし、これに対し頼朝は「頼朝御願書」で、平清盛は「頼朝_加謀叛_乃由、叡聞_於驚_一」かしているが、「凡朝務_連押行_比、郡郷滅亡_須留_一」事態を招いた平清盛こそが、「是豈_ニ非_一謀叛_乎」と強調し、頼朝こそが、

方今無為無事_ニ遂_一參洛_天、防_一朝敵_天、世務_連如_レ元、一院_ニ奉_レ任_天、……
正法_乃遺風_連令_レ繼_卒。

と、上洛し「朝敵」を防ぎ、以前のように後白河院の統治が復活すべく、奉仕するものであるとアピールした。また、

縱雖_一平家_毛、雖_一源氏_毛、不義_連波罰_志、忠臣_連波賞_志賜_倍。

としたが、すでに『玉葉』九月七日程記載の伊勢大神宮への「告文」に

其状云、雖_一平家_於順_一王化_之輩_上者、可_レ施_一神恩_一。雖_一源氏_於蔑_一朝威_之族_上者、可_レ蒙_一冥罰_之由、所_一書載_一也。

と、「源氏」といえども「朝威」を蔑すれば、「冥罰」をこうむるだろうと、後白河院の「忠臣」たることを強調していた。

『玉葉』治承五年八月一日条に、

又聞、去比、頼朝密々奏_レ院云、全無_一謀叛之心_一、偏為_レ伐_一君之御敵_一也。

とあるように、頼朝は、一方で、以仁王の令旨をスローガンにしつつ、一方で、後白河院と密かに連絡をとり、「謀叛之心」なく、「君之御敵」平清盛を伐つだけであるとし、そして、

両氏孰_{いづれ}守_一王化_一、誰恐_一君命_一哉。尤、可_レ御_一覽_一両人之翔_{ふるまい}也。云々。

と、平家と源氏のいづれが、「王化」を守り、「君命」を恐れるのか、「御覧」あるべきとした。

治承五年（養和元年）の伊勢太神宮への「告文」も、頼朝「密奏」記事も、治承六年（寿永元年）の伊勢太神宮への「御願書」も、同じ文脈で理解でき、後白河院の擁護者として理解を得るための、接触の努力としての軌跡がある。そのセールス・ポイントとして、同じ天皇の血筋を継ぐことの強調があり、「清和源氏」の創出がある。

(3) 北条氏「桓武平氏」説

二品政子の父北条時政は、桓武天皇の流れをくむ「桓武平氏」をとらえている。『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）四月廿七日条に、

爰、上総介平直方朝臣五代孫・北条四郎時政者、当国豪傑也。

とあって、時政が「平直方朝臣五代孫」であり、「当国豪傑也」とする。

この二点については、それぞれについて疑問がだされてきた。まず、佐藤進一氏が昭和三十年（一九五五）「鎌倉幕府政治の専制化について」⁽¹⁵⁾において、治承四年以前の北条時政について、

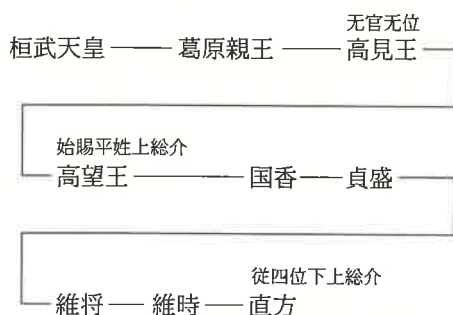
- ① 四十歳を越えた時政が、何の受領ももたず、四郎を称している。
- ② 時政以前に分派した庶家庶族について、知るところがない。

(15)『日本封建制成立の研究』（竹内理三編）、吉川弘文

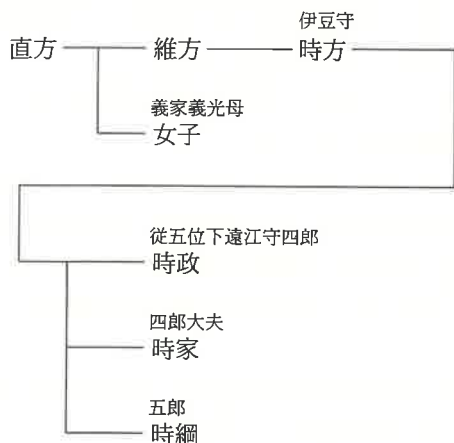
③ 後年北条氏被官として活躍する尾藤氏・諏訪氏は、古くからの家人でなく、伊豆出身でもない。

の三点をあげ、「北条氏の族的系譜及び族的規模を疑わしめる十分な素材」とした。

桓武天皇以降の系譜を記した系図に、「桓武平氏系図」・「尊卑分脈」・「熊谷系図」の三つがある。南北朝初期までの資料に依拠したとされる「桓武平氏系図」⁽¹⁶⁾は、桓武天皇から直方までの系譜を、

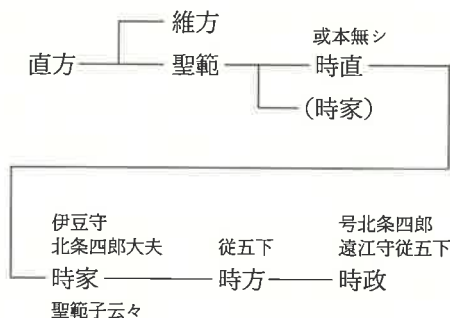


とし、ついで、直方から時政までの系譜は、次のとおりである。



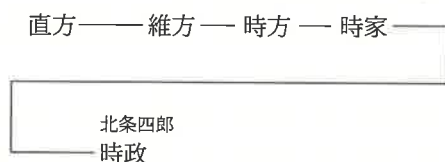
とあって、時政は「五代孫」ではない。また、時政の父を「時方」とする。

南北朝初期の『尊卑分脈』には、



とあり、「時家」に「聖範子」とあり、そうであれば、聖範の子・時直とは兄弟となり、時直は家督を継いでいるから兄で、時家は兄の養子となり、おかしい関係になる。また、「桓武平氏系図」では、時家は時政の「弟」であるが、ここでは「祖父」となる。また、時政は直方の「五代」ではあるが、「五代孫」ではない。

江戸初期の成立とされる『熊谷系図』⁽¹⁷⁾に、



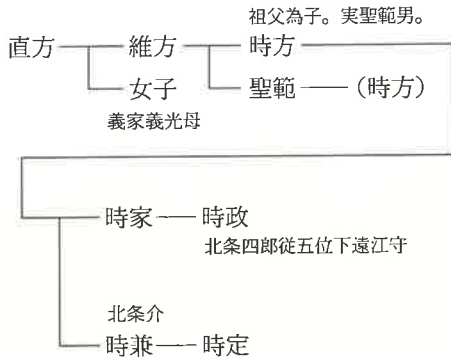
とあって、時家が時政の「父」となっており、やはり直方の「五代孫」ではない。

中世の系図とされる二つの「北条系図」⁽¹⁸⁾は、貞盛からはじまる。この二つの系図は、注に若干の違いがあるが、系譜そのものに差異はない。

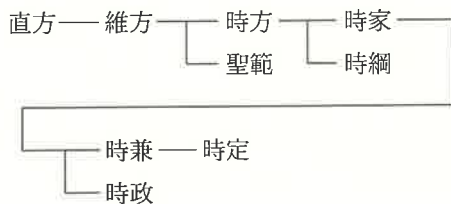
(16)『統群書類従』第六輯上、統群書類従完成会。成立時期については、『群書解題』第一巻（系譜部）による（以下、同様）。

(17)『統群書類従』第六輯上

(18)『統群書類従』第六輯上



とあるが、幕末の万延元年（一八六〇）自殺の飯田忠彦編『系図纂要』⁽¹⁹⁾・「平朝臣姓」北条流では、



時政とあって、時政は嫡系でなく庶系である。

昭和五十四年、杉橋隆夫氏は「北条時政と政子」⁽²⁰⁾において、『吾妻鏡』の記事を援用し、「元来北条氏の家督は時兼——時定系」に属し、時政は庶系で、治承四年以前の時政は、「東国の平凡な豪族の、しかも家督の地位さえおぼつかない生涯でしかなかった」としている。

奥村敬之氏は「北条氏と東国武士」⁽²¹⁾で、「時政以前に関しては不明確なことが多い」とし、「きわめて信憑性に乏しいと云わざるを得ない」⁽²²⁾として、「その所領が狭小で、軍勢力も弱小で、身分としても、たかだか伊豆国の在庁官人程度の存在」とした。このように、北条氏に

時政以前の「分派した庶家庶族」が確認できないことは、とりもなおさず、北条氏が新興勢力であることを示す。また、「直方」以降、特に時政の父でさえ異同が著しい状況は、それ以前の系譜の整然さとあまりにも対称的すぎ、桓武天皇に出自を求めることなど、とても信じるわけにいかない。

(4) 第十五代天皇—神功皇后

『吾妻鏡』編纂者にとって、二品政子が「皇基の擁護者」であると主張するとき、その根拠が「夢想」の尊重の有無と、天照大神の強調だけでは、なんとしても不十分であった。なんといっても北条氏は、源頼信が誉田八幡宮に対する「告文」で、八幡大菩薩（応神天皇）の「廿二世之氏祖也」と強調し、神功皇后の「勲功」を誇示するような、また、夫君頼朝が天照大神の「広前」に、「皇基」につながる「遠祖」を誇示するような、そのような「伝統」とは程遠い「新興勢力」に過ぎなかった。

二品政子が「皇基の擁護者」であるための前提には、単に「神功皇后の再生者」であるだけでは不十分で、「神功皇后」が「天皇」たる必要があった。その意味でこの主張は、神功皇后「第十五代天皇」とする時代思潮を反映し、それに便乗したものであった。

「頼信告文」では、

大菩薩者、本朝大日本国^リ人帝第十六代之武皇矣。……從^リ第十五代女帝・神功皇后之御懷中、降誕^{アマヒシ}之当初、閭巷之諺。諡号称^{シキ} 誉田天皇。

と、神功皇后を「第十五代女帝」とし、大菩薩つまり応神天皇を「十六代」としている。また、

(19)『系図纂要』第八冊、名著出版

(20)『歴史公論』第5巻・第3号（通巻39号）、雄山閣

(21)『歴史公論』第2巻、第7号（通巻8号）、昭和五十

一年

(22)『鎌倉北条氏の基礎的研究』第一部、第一章、吉川弘文館、昭和五十五年

上古者、大菩薩之母后神功皇后、奔^{シテ}波
海上、罰^ニ西国之敵、高^ニ功朝家、撰^ニ
政天下、御宇六十九年也。<sup>本朝女帝
自^レ此始之。</sup>

とあって、割注に「本朝女帝、自^レ此始之」と
さえ強調する。

この「頼信告文」は、石清水八幡宮旧別当・
田中家所蔵のもので、頼信自筆の原本⁽²³⁾でなく
写本であるが、「紙質字体ヲ審ニスルニ、確ニ
鎌倉代ノ古抄本タリ」とされる。「頼信告文」
の割注が、永承元年（一〇四六）当初のものと
すると、平安時代の事例⁽²⁴⁾となり、また、写本
時の注としても、鎌倉時代の神功皇后「第十五
代天皇」説の一つの事例であることに変りはない。

平安時代の事例に、寛治八年（一〇九四）以
降で、堀河天皇期の編纂の『扶桑略記』⁽²⁵⁾第二
に、「神功天皇」とし、「十五代。治六十九年。
王子一人即位。女帝始^レ之」とある。鎌倉初期
の事例に、文治～建久（一一八五～九八）頃の
成立⁽²⁷⁾の流布本『水鏡』⁽²⁸⁾に、

十五代神功皇后

辛巳の歳十月二日、位につき給ひき。女帝
はこの御時始まりしなり。世をたもち給ふ
こと六十九年。

とする。

また、承久三年（一二二〇）五月の「承久の
変」以前の脱稿とされる慈円の『愚管抄』⁽²⁹⁾巻第

一にも、

十五

神功皇后。摂政六十九年。

とあり、注に「元年辛巳。卅二即位。御年百」
とする。

「頼朝願文」に、「五十六代ニ相当^{礼留}清和
天皇」とあった。現在の「歴代天皇表」も第五
十六代を清和天皇とするが、これは「第十五代
神功皇后」を否定し、「第三十九代」を「弘文
天皇」とするところからくる偶然の一致にすぎ
ない。これは、水戸藩が編纂した『大日本史』
の「三大特筆」、

① 神功皇后を皇位から除外する。

② 天智天皇の皇子、大友皇子を「弘文天皇」
として皇位に加える。

③ 南朝を正統とする。

にもとづき、明治政府が明治三年（一八七〇）
に行なった政治的決定にすぎない。洞院満季が
後小松天皇の命によって編纂し、応永二十三年
（一四二三）に草稿がなり、その後も加筆され、
明治・大正・昭和天皇も記入されている『本朝
皇胤紹運録』⁽³⁰⁾も、「第十五代」は神功皇后であ
り、「弘文天皇」は代数に入っていない。した
がって、「頼朝願文」の「第五十六代清和天皇」
とは、「第十五代」を神功皇后として代数を数
えたものである。

それでは、『吾妻鏡』の土御門院の土佐遠流

(23)「頼信告文」写本の影印は、『続石清水八幡宮史料
叢書』一（続群書類従完成会）に掲載。

(24)前掲書『史学雑誌』一一編二号

(25)「住吉大社神代記」（田中卓著作集 7『住吉大社神
代記の研究』、国書刊行会）[写真版] 187～8 行割注
に、「氣息長姫天皇。諱神功。天皇第十五代」とある。
成立については、田中卓氏が「天平三年原撰・延暦書
写」説を主張。批判に西宮一民氏の「天曆～長保年間
（九四七～一〇〇三）」説（『住吉大社神代記の仮名遣』、
『日本上代の文章と表記』、風間書房）。また、坂本太
郎氏の「元慶年間（八七七～八四）以後」説（『住吉

大社神代記について』、坂本太郎著作集 第四巻、吉
川弘文館）がある。これによって、平安時代に神功皇
後の「第十五代天皇」説が主張されていたことが確認で
きる。

(26)国史大系、吉川弘文館。成立は平田俊春氏の「水鏡
の成立と扶桑略記」（『日本古典の成立の研究』、日本
書院）による。

(27)前掲書、「水鏡の成立と扶桑略記」

(28)岩波文庫『水鏡』

(29)日本古典文学大系『愚管抄』、岩波書店

(30)『群書類従』第五輯、続群書類従完成会

の記事（承久三年閏十月十日条）に、「八十五代之今」とあり、仁治元年（一二四〇）以前の成立とされる慈光寺本『承久記』上⁽³¹⁾に、

人王ノ始ヲバ、神武天皇トゾ申ケル。葺不合尊ノ四郎ノ王子ニテゾマシマシケル。其ヨリシテ去ヌル承久三年マデハ、八十五代ノ御門ト承ル。

とある「八十五代」をどの天皇に比定すべきか。

現在の「歴代天皇表」は、八十五代を「仲恭天皇」とするが、『帝王編年記』⁽³²⁾に「七月八日天皇奉_レ 廢之」とあって、鎌倉幕府は「仲恭天皇」を「廢帝」処分にした。その鎌倉幕府が歴代天皇の代数に「仲恭天皇」を含まないのは当然である。「八十五代之今」が「後堀河天皇」の「今」であることは、承久三年閏十月十日当時の天皇が、「後堀河天皇」である歴史的事実に完全に合致する。

また、この「八十五代」は、慈光寺本『承久記』が、

十四代ノ国王ヲバ、仲哀天皇トゾ申ケル。
其后ヲバ神功皇后トゾ申ケル。帝、崩御成テ後、世ヲ治メ給フ。女帝ノ御門ノ始也。
御心極テ武クゾ御座マス。

とするように、神功皇后を「第十五代天皇」とする前提に立つことは、明らかであろう。

流布本『水鏡』と『扶桑略記』が、「飯豊皇女」を「第二十四代」に比定し、『愚管抄』や『帝王編年記』が、「仲恭天皇」を「第八十五代」に比定するような小異はあっても、『住吉大社神代記』を含め平安時代以降、江戸時代にいたるまで、神功皇后が「第十五代天皇」であることは、不動の歴史的概念として認識されてきた

のである。

承久三年（一二二一）の「承久の変」を前後する時期は、新しい神功皇后像が完成し、新しい神功皇后「新羅征伐」譚が、基本的に完成を見た時期であった。この物語の核心部分である「乾珠満珠」譚や、「新羅は日本の犬」譚は、建保七年（一二一九）には石清水八幡宮において、集録⁽³³⁾された。

佐渡遠流の順徳天皇の『八雲御抄』⁽³⁴⁾は、遠流時には未定稿が成立、その後も加筆され、最晩年に完成されたものとされるが、その巻第四・言語部に、

一、あめつちのともにひさしくいひつげと

このくしみたましかしけらしも

これは神功皇后の新羅国をうちたまひし時、二の石を御ものこしに、さしはさませ給たりし也。是誕生あらじゆゑ也。件の石をくしみたまと云也。たゞし、ひめ神のちごゝが彼国をばうちし也。

と、「ひめ神のちごゝ」応神天皇が「新羅国」を討ったとなっている。

『極楽寺殿御消息』⁽³⁵⁾は、北条政子の弟義時の三男重時の家訓であるが、没年の弘長元年（一二六一）に近い頃のものと考えられ、これに、

又、おさなきとていやしむべからず。八幡^{〔胎内〕}たいないより事を御はからひあり。

とある「八幡、胎内より事を御はからひ」は、『八雲御抄』の「ひめ神のちごゝが彼国をばうちし也」と同様のことを指している。

慈光寺本『承久記』は既述の部分について、^(ママ)
中哀天皇ハ異国ノ為ニ崩御ナリシカバ、鬼界・高麗・契丹ノ三韓ヲ打取テ、我朝ノ進

(31)新日本古典文学大系『保元物語・平治物語・承久物語』、岩波書店

(32)国史大系、吉川弘文館

(33)拙稿「謡曲『剣珠』『西宮』と干珠満珠」、『鷹陵史

学』第19号、仏教大学鷹陵史学会

(34)『日本歌学大系』別巻三、風間書房

(35)日本思想大系『中世政治社会思想』上、岩波書店

退ニナサバヤト思食、十万八千騎ノ軍兵ヲ引率シテ、筑紫ノ博多ニ打下リ、船ヲ汰^{もろ}へ玉フ。其折節、御懷妊有。漸十ヶ月ニモ成ケレバ、王子生レントシ給シカバ、胎内ノ王子ニ申玉フ様、「王子誕生有テ後、果報目出度、位ヲ治玉フベキナラバ、只今ハ誕生ナラデ、兵乱過テ後、生レ玉ヘ」ト申サル。

とあって、『日本書紀』の「事竟へて還らむ日に、茲土に産れたまへ」とくらべ、明らかに飛躍がある。

『八幡愚童訓』甲⁽³⁶⁾の初稿本は、永仁元年（一二九三）から正安二年（一三〇〇）間成立とされるが、これに、

皇后ハ御産ノ氣出来リ、……「奉_レ我孕_レ御子、日本ノ主ト成リ給ベキナラバ、今一月胎内ヲ出サセ_レ可_レ給」、誘へ申サセ給シカバ、御腹ノ内ヨリ「……軍静マランマデハ生ルマジ。トク異国ニ向ハセ給へ」ト申サセ給フ。……日本仲哀帝ノ皇子ハ、母后ノ御腹ニ坐テ、親ノ御敵ヲ討ント也。

と、応神が胎内から声をだして「励マサレ」た結果、「御腹ニ坐テ、親ノ御敵ヲ討」ったとされた。これが『八雲御抄』の「ひめ神のちごどが、彼国をばうちし也」とする内容であったことが、逆推できるのである。

このように、「承久の変」を前後した時期は、神功皇后が注目され、「第十五天皇」として改めて強調された時期であり、それにふさわしく新しく脚色を加えた応神誕生譚が、基本的な完成を見た時期なのである。

承久三年の二品政子にとっては、「天皇・神功皇后」であるからこそ、「再生者」の強調が

「皇基」に連動しえたのであり、「皇基の擁護者」として、天皇遠流の処置を合理化でき、非難をかわしうると考えたのである。

第二章 日野富子と女国—姫氏国—

(1) 一条兼良の「小夜のねざめ」

日野富子は、室町幕府第八代将軍・足利義政の正室で、第九代将軍・義尚の母であった。



関白太政大臣も歴任した一条兼良が、応仁の乱後の文明十年（一四七八）頃、日野富子の求めで撰進した「小夜のねざめ」⁽³⁷⁾で、

大かた此日本国は、和国とて女のおさめ侍るべき国也。天照太神も女跡にて渡らせ給ふうへ。神功皇后と申侍りしは、八幡大菩薩の御母にて渡らせ給しぞかし。新羅百済をせめなびかして、此葦原の国をおこし給ひき。

と、日本を女性が治めるべき「和国」と定義し、天照太神と神功皇后の二人を、日本の成り立ちとむすびつけて位置づけた。つづいて、

近くは鎌倉の右大将の北の方尼二位殿は、二代将軍の母にて、大将ののちはひとへに、鎌倉を管領せられ、いみじく成敗ありしかば、承久のみだれの時も、此二位殿の仰とてこそ、義時ももろもろの大名には下知せらしが、されば女とてあなづり申べきに非ず。

(36) 日本思想大系『寺社縁起』。成立は、西田長男氏の解題（『群書解題』神祇部）に依拠。

(37) 『群書類従』第二十七輯。成立については、永島福太郎『一条兼良』（人物叢書）による。

と、近代の事例として北条政子を取りあげ、
昔は、女躰のみかどのかしこく渡らせ給ふのみぞ、多く侍しか、今も誠にかしこからん人のあらんは、世をもまつりごち給べき事也。

と、昔、「女躰のみかど」が「かしこく」統治したように、現在の「かしこからん人」日野富子の政道を正統化するのである。

小林千草氏⁽³⁸⁾は、一条兼良が「全く従来の常識をやぶる説を展開している」とする。しかし、兼良はいささかなりとも、時代思潮から突出した意見を主張したのではない。兼良は時代の「常識」をただコピーしただけに過ぎない。

『吾妻鏡』は北条政子の薨伝にさえ、政子による「女のおさめ」を正統化するため、女性が「世をおさめ」る事例を中国に求め、「前漢之呂后」を例にあげた。再記すると、

同_二 于前漢之呂后_一 令_レ 執_二 行天下_一 給。
若又神功皇后令_二 再生_一。令_レ 擁_二 護我国皇基_一 給歟_々。

『吾妻鏡』との前後関係に問題があるが、既述の『六代勝事記』にも、

昔の呂太后は高祖の後也。高祖にをくれて猶世をおさめ、則天后は太宗の後也。太宗にをくれて猶世をおさむ。

とあるように、夫に先立たれたあと「世をおさめ」た中国の事例をあげ、また、

我朝神功皇后は仲哀天皇の後也。天皇におくれ給ひてなを世をおさめ、みづからいくさをおこして、異国をなびかして天下を得たまへり。

と、日本の神功皇后を取り上げた。そのうえで、次のように、夫頼朝に先立たれた北条政子の統

治の正当性が強調された。

……而、頼朝卿の本誓をおもくせし後室、冥慮をたのむにあひかなひて、女性世をおさむるにたれる事、直也人にあらざるものか。

また、南北朝期の後半から室町期初期の改編とされる現存『真名本 曾我物語』⁽³⁹⁾巻第三に、
卦けまくも恭くも、異国の則天皇后は夫を重くして位に即き、本朝の神功皇后は夫の仲哀天王^(ママ)の別を悲しみて遺跡^{ゆいせき}を尋ねつつ、女性なれども世を取らせ給ひつつ、日本国の皇帝とはならせ給ひぬ。今の北条の妃も女性なれども……

とあり、『大石寺本 曾我物語』⁽⁴⁰⁾巻第三にも、
抑異国の則天皇后は、夫を重んじて位に即き給ふ。我朝の神功皇后は、仲哀天皇の遺跡を尋ね、女性なれども世を治め給ひぬ。
今北条の姫君も……

と、「異国の則天皇后」と「本朝の神功皇后」に言及された。

一条兼良の「小夜のねざめ」の発言は、このような時代思潮を背景にして生れたものであった。兼良は、文明十二年（一四八〇）七月二十八日、十五才になった將軍義尚^{よしひさ}の求めに応じて撰進した「樵談治要」⁽⁴¹⁾においても、

もろこしには、呂太后と申は漢の高祖の後、恵帝の母にて、政をつかさどり侍り。唐の世には、則天皇后と申は高宗の後、中宗の母にて、年久敷世をたもち侍り。……簾中ながら天下の政道ををこなひ給へり。これを垂簾の政とは申侍る也。

とし、中国の「垂簾の政」として、呂太后と則天皇后をあげ、「ちかく」の「垂簾の政」の例、

(38) 中公新書『応仁の乱と日野富子』

(39) 東洋文庫『真名本 曾我物語』I、平凡社。成立については、解説による。

(40) 国史叢書『源平軍物語・大石寺本 曾我物語』、大正三年

(41) 『群書類従』第二十七輯

「尼二位政子」を強調した。

(2) 女のおさめ侍るべき国—姫氏国

一条兼良は「小夜のねざめ」で、「和国とて、女のおさめ侍るべき国」と主張した。これはなにも兼良の独創的な主張ではない。鎌倉末期の『釈日本紀』⁽⁴²⁾巻第一、開題、日本国に、

問。倭字之訓。其解如何。

答。……陸法言云、鳥和反。東海中女王国。と、「倭」の意味を「東海ノ中ノ女王国」としているが、兼良の主張の典拠は、この『釈日本紀』にある。

兼良は「樵談治要」、「一、簾中より政務をおこなはるゝ事」において、

此日本国をば姫氏国といひ、又倭王国と名付て、女のおさむべき国といへり。されば、天照太神は始祖の陰神也。神功皇后は中興の女王たり。此皇后と申は、八幡大菩薩の御母にて有しが、新羅百済などをせめなびかして、足原国をおこし給へり。目出かりし事ども也。

と、日本を「女のおさむべき国—姫氏国」とし、「倭王」を「女王」と同義語と解釈した。さらに、「小夜のねざめ」と同様、天照太神や神功皇后を、日本国の成立そのものに関連させた。『日本書紀纂疏』⁽⁴³⁾上一でも、

姫氏国、出宝志和尚識文。……但考韻書、姫婦人之美称。而天照大始祖之陰霊。神功皇后中興之女王。……

としたが、これは『釈日本紀』が、

問。此国謂東海女国。又謂東海姫氏国。若有其説哉。

答。師説。梁時、宝志和尚識、云東海姫氏国者、倭国之名也。

とし、

今案、天照太神始祖之陰神也。神功皇后、又女王也。就此等義、或謂女国。或称姫氏国。

とする解釈のコピーに過ぎない。晩年の著『日本書紀纂疏』の注釈が、『釈日本紀』に多く依拠していることは、既に指摘⁽⁴⁴⁾されている。

ところで、日本という国が「女のおさめ侍るべき国」とされ、しかも、神功皇后が「女帝」であるとする思想は、すでに平安時代の初期から存在した思想である。承平六年（九三六）十二月八日の「書紀講書」⁽⁴⁵⁾での記録『日本紀私記』⁽⁴⁶⁾丁本⁽⁴⁶⁾に、

問。此国称姫氏国。若有其説乎。

師説。梁時、宝志和尚識云東海姫氏国。

又本朝僧善禰推紀云、東海姫氏国者、

倭国之名也。今案、天照大神者始祖陰神也。神功皇后者又女帝也。依此等、称姫氏国。

とあり、これが『釈日本紀』に引用され、兼良の『日本書紀纂疏』に孫引きされたのである。

平安初期の神功皇后「女帝」説は孤立した事象でなく、神功皇后「第十五代天皇」説と連動した、一つの事象の両側面を示すものである。平安時代は、神功皇后像に確かにある変化が起き、新しい神功皇后譚が創作されつつあった時代である。たとえば、顯昭の『袖中抄』⁽⁴⁷⁾に、

又神功皇后伐新羅給之時、住吉は大將軍、日吉は副將軍。將門追討之時は、日吉は大將軍、住吉は副將軍也。三千法施しげ

(42) 国史大系『釈日本紀』、吉川弘文館

(43) 『国民精神文化文庫』四、国民精神文化研究所

(44) 中村光「中世に於ける日本書紀の研究」、『本邦史学史論叢』上巻、富山房、昭和十四年

(45) 国史大系『日本紀略』、後編二。朱雀院、承平六年十二月八日条、廿四日条、天慶六年十二月廿四日条。

(46) 国史大系『日本書紀私記』

(47) 『日本歌学大系』別巻二、風間書房

きによりて、日吉位まさり給よし江記に侍り。

とある「江記」とは、院政期の思想家大江匡房の日記（現存の「江記」にこの部分はない）であるが、これにより、院政期に、住吉大將軍・日吉副將軍の「新羅征伐参戦」説の創作が確認できる。

鎌倉初期の文治四年（一一八八）までには成立の片仮名古活字三卷本『康頼 宝物集』⁽⁴⁸⁾に、

神功皇后のせめ給ひし時、安部の氏をもて大將軍とせり。そのゆへに、安部の氏の長者をめして、大嘗会のたびごとに、吉志舞を仰らる。

とあるように、「安部大將軍」説が創作され、「吉志舞」の由来にむすびつけられていた。これらが、神功皇后「女帝」説と「天皇」説の土壌のうえで、創作されたものであることは明らかであろう。

平安時代だけでなく、神功皇后「第十五代天皇」が強調された「承久の変」前後の時期に、「胎内」の応神天皇「新羅征伐」指揮譚が吹聴されたのも、決して偶然でなく、その相互依存関係をよく示唆している。

一条兼良の主張の根源を、考証という彼の学問的方法論だけに求めるのは正しくないであらう。

う。為政者をふくめた当時の人々の「朝鮮観」を、正確に反映したものである。富子の夫君第八代將軍足利義政が、文明二年（一四七〇）十月十四日、自筆の願文⁽⁴⁹⁾を諏訪大明神に奉納した。これに、

爰当社^者威徳^於外国^爾施^之、神変^於咫尺^仁
 顯^天、是^於七不思議^止稱^須。草創^乃昔^与利、
 垂跡^乃今^仁至^満天、或^者三韓^乃異賊^於降伏
 之、或^者我国梟惡^於追伐^須。

とあって、諏訪大明神が「威徳」を外国に示し、「三韓乃異賊」を降伏させたといっている。

『諏訪大明神絵詞』によれば、諏訪大明神の「化現」を「仁王十五代神功皇后元年」とし、「三韓征罰の曩意（初志）」を、「永世相承左右」に伝えるものとするが、歴代の足利幕府の諏訪大明神への認識は、初代將軍尊氏がこの絵巻の各巻ごとに「奥書」を書き、時の後光厳天皇が「外題」を書いて以来の伝統的認識であった。なかでも、諏訪大明神の「三韓征伐」参戦説は、特に室町時代に広く吹聴された思想⁽⁵⁰⁾であり、足利義政にとって旧聞に属す常識的概念であった。それは、日野富子にとっても事情は同じであり、一条兼良の講義を受容する土壌としての歴史意識であった。

(48)新日本古典文学大系『宝物集・閑居友・比良山古人 靈託』、岩波書店

(49)『信濃史料』第九巻、文明二年十月十四日条、信濃史料刊行会

(50) 拙稿「南北朝・室町期における朝鮮観の中心思想」、『東アジア研究』第六号、大阪経済法科大学アジア研究所。拙稿「殺生と和光同塵と諏訪大明神と神功皇后と」、『鷹陵史学』第二〇号、仏教大学鷹陵史学会。

